



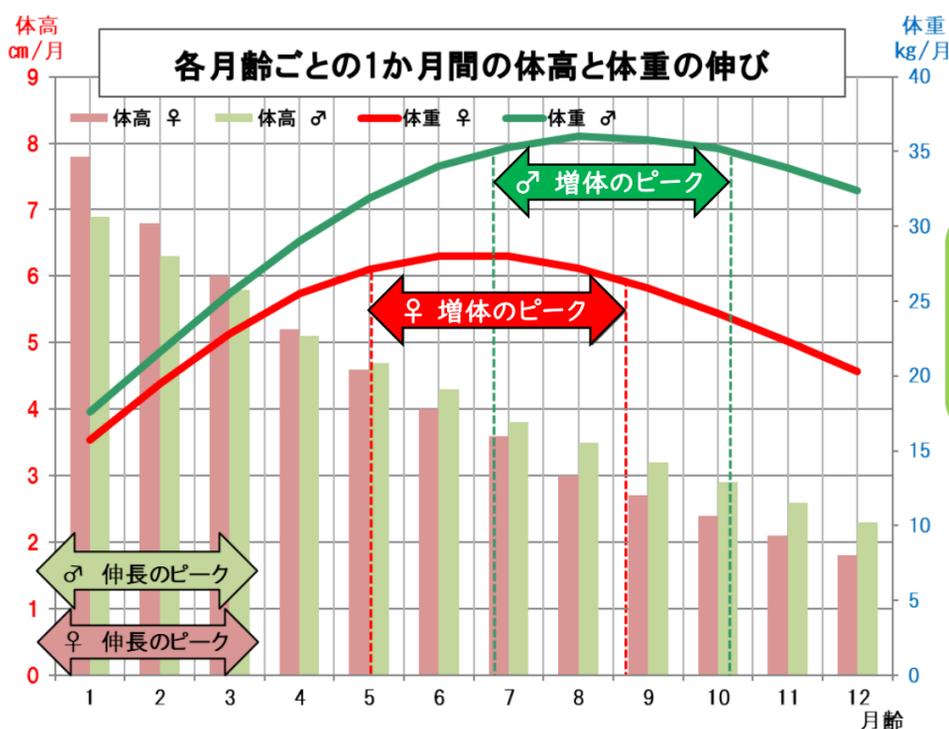
子牛の発育 ～体高・体重 いつ伸びる？～

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

さて、昨今の子牛市場は厳しい相場が続いておりますが、対策としては「体高・体重がしっかり発育した牛を作る」ことに尽きると思います。そこで今回は、子牛の発育のタイミングと飼養管理について考えていきましょう。

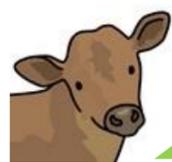
1 体高・体重 いつ伸びる？

体高は生後0～3か月齢頃、体重は去勢で7～10か月齢頃、雌で5～9か月頃が伸びのピークです。つまり、この時期の管理が非常に重要で、栄養不足や風邪、下痢でつまづくと、その分を取り戻すのは至難の業となります。



体高は産まれてすぐに伸びがピークということは、子付き管理では母牛に任せるしかないのか？

私に任せるというのなら、私のコンディションをしっかり整えて欲しいわね。お腹の子やお乳を出すのに栄養が必要だから、いつもより配合を2～3kgは多く欲しい所だわ。



それ以外にもスターターの給与（次ページ参照）や寒冷/暑熱対策、ワクチンなど、出来ることはたくさんあるよ！

2 牛の場合、母がなくては子は育たぬ

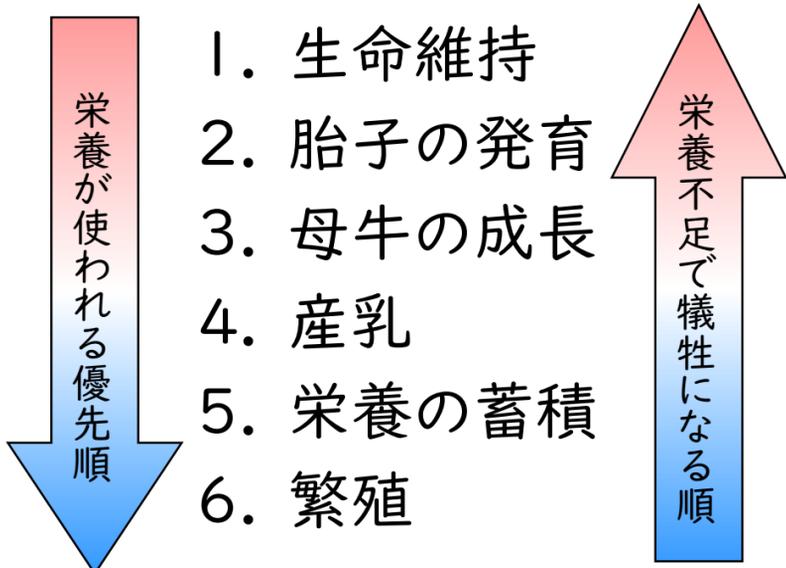


図 栄養が使われる優先順位

生後すぐの子牛の栄養を充足させるためには、当然、**母牛の管理（増飼い）が重要**です。

母牛の栄養が使われる優先順位は、左図のとおりです。授乳期に栄養が不足すると、**母牛は自らの体組織を削ってでも産乳に充てます**。しかし、そういった乳は**質が低下**しており、**飲んだ子牛の下痢（白痢）**に繋がります。

また、**胎子段階では子牛の免疫機能の発達にも栄養が使われる**ので、健康な子牛を作るために増飼いは欠かせませんね。

表 繁殖ステージ毎の飼料給与例(繁殖牛450kg)

時期	給与例(kg/日)		
	牧草サイレージ	稲わら	配合
妊娠維持期	7.5	2.0	—
妊娠末期 (分娩予定2カ月前～)	7.5	1.0	2.0
授乳期 (泌乳量 6kg)	9.0	1.0	3.5

配合の増給は1kgにつき5日程度かけてゆっくり増やすことが重要!



※牧草サイレージは県内の平均的なオーチャードグラスを想定

3 増体と腹づくり

育成期は、骨格や内臓が発達し、牛が大きく成長する時期です。だからと言って、配合を与えすぎると無駄な脂肪が付き、子牛市場で嫌われたり、雌は将来的に繁殖機能が低下してしまいます。

体重が乗っても、エサ代をかけて太らせ、市場で嫌われる牛を作るのは二重の無駄だよなあ...

配合は4kg程度を上限とし、粗飼料主体の給与を心掛けましょう。第1胃ができあがる**6カ月齢までは柔らかく栄養価の高い再生草**を、**7カ月齢以降は1番草などの硬めの粗飼料**で、第1胃の筋肉層の発達を促しましょう。



《子牛を大きく育てよう!》～岩手県肉用牛飼養管理マニュアルから～

～ 哺育牛の飼養管理「スターター」について～

マニュアルのダウンロードはこちら→



スターターの役割

- 1 栄養補給**
子牛の飲乳量は不安定
→ 不足しがちな栄養をスターターがカバー
- 2 第1胃の発達促進**
スターターの発酵分解により第1胃の絨毛が発達
- 3 粗飼料の消化促進**
第1胃内の微生物が活発化
→ 粗飼料を消化できるようになる

スターターの特徴

- ・タンパク含量が高い
- ・エネルギーが高い
- ・発酵が穏やか
- ・吸収しやすい

スターターの効果

- ・前躯巾、肩の充実
- ・体高の伸長
- ・免疫力の向上

ポイント

スターターは子牛のための子牛に欠かせない離乳食です!

生後1週間頃、数十グラムから、与えはじめます。食べ残しは廃棄して、毎日新鮮なものを与えます。

